

私たちの町の文化財

■第7話 専崇寺のキリシタンベル

専崇寺の始まりは、『肥後国史』によると「右同(西光寺内末寺)慶長年中造立、寛永十年寺號免許」とあり、寛永10年(1633)に西光寺末寺として寺号を許されました。この専崇寺には、手水鉢として使われている鉄製の器があります。これは、キリシタンベルと呼ばれ、教会で目にする鐘にあたります。どのような経緯でこの鐘が伝わったのか、詳しいことはわかりません。これと類似する鐘は、京都市妙心寺・竹田市サンチアゴ・細川家所蔵品などがあり、国内でもごく少数に限られます。専崇寺の鐘をみると「妙見講女連中」という銘文が確認できます。ではなぜ、キリスト教信仰の象徴ともいえる鐘に、妙見信仰に由来する銘文があるのでしょうか。一つは、表面上は日本の宗教信仰を示しつつ、裏ではキリスト教を信仰していた。即ち、この鐘が作られた時代はキリスト教弾圧があったと推測されます。もう一つは、当時の隠れキリシタンが妙見をキリスト教の天帝と結びつけることで、信仰の拠り所としていたことに由来します。キリスト教信仰に対する厳しさは、豊臣秀吉のバテレン追放令(1587)を皮切りに、徳川家康のキリスト教禁止令(1612)やそれ以降、さらに厳しさを増していきます。こうした時代背景のもと、この鐘はひっそりと信仰されていたのかもしれませんが。

熊本市文化振興課 藤島 志考氏

なにげに置いてある
洋風鉄鐘に
そんな時代背景が
あったとは…

